
東方果实鎧『紅』

かりーぱん

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方果实鎧『紅』

【作者名】

かりーぱん

【あらすじ】

秘密を暴く。

世界を己の色に染める。

君何をは求めるか。

君は何を背負えるか。

人は、己一人の命すら思うがままにはならない。

誰もが逃げられず、逆らえず、運命という名の荒波に押し流されていく。

だが、もしもその運命が君にこう命じたとしたら？

「世界を変えろ」と。

「未来をその手で選べ」と。

君は運命に抗えない…だが、

世界は君に託される。

1. 夢と神様

『葛葉 ああああ！！！！！』

『戒斗 おおオオオ！！！！！！』

人の気配を感じさせないゴーストタウンと化した都市で彼らは互いの名を叫び合い、その身をぶつけ合う。

————一人はこの世界への希望を胸に秘め。

————一人はこの世界への怒りを拳に秘め。

一人は幾千もの戦いを極めた王のようで、神々しい光と共にその身に白銀の鎧を纏う。

対するは、赤と黄色のステンドグラスのような体と頭の左右からは角を生やした「魔王」が如き姿。

『これで…終わりだ』

『それでも…俺は！！！！』

決着の時は来た。

魔王は白銀の鎧武者が持っていた、橙色の太刀を己の所有する大剣で吹き飛ばし、鎧武者は地面に膝をつく。

『うおおおおお！！！！！！！！！！』

魔王が振り下ろした大剣は————。

「zzz……んが」

目を覚ますと周りは静謐に包まれ、自分自身は珍しくスーツに身を包んでいた。

前を見ると学長らしき人が学校の歴史や創設者の人格者云々を熱弁していた。

そうだ、今日は大学の入学式だ。じゃあ、式典で寝るなよ。ってのは勘弁してもらいたい。バイトの疲れがすごかったんだ。それにかったるいことは眠くなるだろ。

時計を見ると十一時五十分を指していた。あと十分だあとは学部ごとに分かれて学生証をもらうだけの作業となる。もう少しだけ頑張りますか。

一時間がたった午後一時には。ほとんどの学部の生徒が解散していた。

これで晴れて自由の身。この日はバイトが入ってないので残りは休暇として使えるのだが、ここで問題が発生した。

「……迷った」

サークルや部活の勧誘を避けながら歩いて行ったら迷っていた。もはや来た道もわからない。

適当に歩けばつくだろうと思いいたり歩き始めると、視界の端に小さな人だかりが確認できた。

「ねえ、ちょっとどいてくんない？ 私たち、これから用事があるから早く帰りたいんだけど」

「ツレねえと言うなよ。俺たちと遊ぼうぜ」

真ん中にいたのは少女が二人、黒髪に中折れ帽を被った少女に、金髪にナイトキャップを被った少女がナンパにあっているようだ。しかも金髪の方が黒髪の後ろに隠れちまってるし。

「って、あそこが出口じゃん」

運のないことに人だかりができている場所はちょうど校門だった。スルーしたかったのに。あそこを素通りできるほど俺人間性死んでねえよ。しかたない、あれやるか。仕掛けるポイントはこの先の五連続ヘアピンカーブだ（ありません）。

「なあ、みんなで遊べば楽しいぜ？」

「ハァ……あんたたち。そろそろいい加減に「よお。やっと見つけたぜこんなとこにいたのか」？」

仕方ないから正面突破だ。あのトゲトゲ頭さんのあれで切り抜けるしかない。失敗してたけど。

「探したぞ」

「（……ああ、そういうと）ええ待ったわよ」

「そういうことなんで連れが世話になりましたー。通しておくんなー」

そういつて駆け足でその場を離れた俺らをナンパしてたモブどもは茫然と見ているだけだった。

「しかし、成功するもんだな」

「いやゝ。さっきはありがとね。助かったわ」

「ありがとうございます！」

「まあ、気をつけな」

さて、障害がなくなったところでやっと休暇がやって、

「あ、あの！何かお礼を」

「いやいいよ。勝手にやったことだし」

「じゃあ、お礼とか関係なくちょっと私たちに付き合いなさいよ」

「んだよ。今度は逆ナンか？」

ちよっと挑発するように言ってみた。この逆ナンということによって「こいつ何調子乗ってんの？」と思わせるところがポイントだ。

「それでいいわよ。それにあいつらにまたナンパされたらどうすん
のよ？助けたなら最後まで責任を持ちなさい」

ぐ、こいつ。痛いところつきやがる。だが正論だからぐうの音も
出ない。嗚呼、俺の休暇があ。

「へいへい。改めて、葛葉智幸だ」

「私は宇佐美蓮子」

「マエリベリー・ハーンです」

これが、このメビウスの輪の物語の始まりだった。

「って、何夢の中で寝てるんだよ。懐かしいなこん畜生」

本当に懐かしい夢だ。一体何年前の記憶だろうか。

改めて、俺は葛葉智幸。今は宇宙の神様だ。

しばらく地球を離れていたんだが、折り言った事情で帰ってきた
はいいんだが、

「さて、どこで寝泊まりしようか」

現在、森の中で絶賛迷子になってる。たぶん『ここ』に寄生して
るはずなんだよな。さっき「アタイったらサイキョーね！」と言
いながら妖精に襲われたから間違いないと思うんだが。

そう思いながら森の中を突き進んでいると、そこには真っ赤な館
が立っていた。

2. 紅魔館と錠前

真っ赤な館の門に一人たたずんでいる。いや、もたれかかっている。ていうか寝てる。

「おい。嬢ちゃんや。おーきーてーくーれー」

寝ている門番の頬を叩いたり脳天にチョップをかましたりしてるとやっと起きた。

「うゝん。……………Σ（。㇏）ハッ！！ささささささささ咲夜さん！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！もう寝ないんでナイフだけはやめてくださいお願いしますう！」

「……………とりあえず。人違いだから。顔を上げてくれ」

なんかこの門番が可哀そうに見えてきた。何？ここの職場は寝てたらナイフ飛んでくるの？こわっ。

「へ？あ、何かすみません」

「……………」

「……………」

沈黙がづらい。そして雰囲気気まずい。

「えっと。どちら様なんでしょうか？」

「あ、はい。んん！俺は葛葉智幸。元人間。今は宇宙の神様だ」
訝しげなものを見る目を向けられているが、何とも、いや来るものがあるな。

「で、俺ここの土地勘があんま無いから途方に暮れちゃってさ。泊めてくれそうなところを探し回ってたんだ。できればここの主に取り次いでもらえないか？」

「……………わかりました。少々お待ちください」

十分後。

さっきの門番のように門にもたれかかってボーとしていると。突如人の気配がした。

「うお！？ビビった」

まるで、時を止めたかのように目の前に現れた。

「美鈴から話はお伺いしております」

「で、主殿はなんと？」

「ぜひ泊まっていけ、と」

「そうか。ぜひお礼を言わないとな。俺は葛葉智幸。嬢ちゃんは？」

「咲夜、十六夜咲夜と申します」

では、案内しますのでついてきてください。といわれ彼女の後ろを追隨する。

しばらく、歩くも一向に部屋へ着かない。

「どこへ向かってるんだ」

「この館の主。レミリアお嬢様のところへ。ぜひ、お会いしたいとはあゝん。なるほどねえ。礼は言いたいしありがたい話ではある。

明日になると忘れそうだから。

「ここが、お嬢様のいる部屋になります。くれぐれも粗相のないように」

「委細承知した」

目の前にある重厚な扉へ手をかける。扉を開けたその先には幼女と言っても差し支えないような女の子がいた。が、見た目に騙されてはいけないのがここ、幻想郷だということを俺は知っている。

「君がこの主、でいいんだよな？」

「ええ。私がこの主レミリア・スカーレットよ。今宵はこの紅魔館へようこそ」

口角を上げ嗤い、笑みを浮かべるレミリアちゃんをそしていつの間にかそばに控えた咲夜ちゃんを俺は見ると、観る。

「咲夜、さっそくお客様を「まあまあ、レミリアここは建前はなしにしよう」……どういう意味かしら？」

「ここは幻想郷。忘れられし者たちの楽園。人間から空想上の生き物が跋扈する場所だ」

「何が言いたい？」

「俺を出し抜いて喰らおうなんて二十世紀早いつてことさ。――
――――吸血鬼さん？」

今度は俺の番と言わんばかりに不敵な笑みを浮かべると、レミリアちゃんは控えていた咲夜ちゃんの名前を呼び指示を出す。

一回の瞬き。俺の視界からは咲夜の姿が消えていた。まただ。いきなり消えた。だが、

「――――『時間を操る程度の能力』と言ったところか。敵の前では能力を使いすぎないことだな。お嬢ちゃん」

種が割ればこっちのものだ。俺は力を使う。すると俺の後ろから無数の蔦が生え始め真後ろで今まさにナイフを振りかぶっている咲夜を拘束する。

このような敵のすることはたかが知れている。不干涉時間を利用した死角からの攻撃だ。

「っ！」

「駄目だぜ。俺の前で二回も能力を使っちゃ。種明かしをしている手品と同じだ」

「……………いつから。気づいていた」

「この館からこびりついた血の匂いがプンプンしてるからな。それと、牙と羽隠せてないぞ」

「……………人間にしては中々面白い奴だ」

「いや、だから宇宙の神様だって」

「ククク。いつまでその減らず口を叩けるかな？」

後ろから凄まじい殺気を感じた。とっさに回避すると空気がブレた。何かが通過して空気がブレて震えた。一発もらったらやばかったな。流石吸血鬼。

「フラン。起きてたのね」

「うん！美鈴が新しいお人形が来た！って」

「ありがとうございます。妹様」

って、咲夜ちゃんまで助けられてやんの。門番さんまで来てるし。四対一か、厄介な。

「あれは、中々に生きのいい人間よ。あれの実験にはちょうどいいわ」

「あれをお使いになるのですか？」

「ええ、みんな。存分に使いなさい」

そういうところからバックルを取り出し腰にかざすとベルトへ変化した。さらに果物の意匠が施された錠前『ロックシード』を取り出す。

「ロックシードはともかく、なんで戦極ドライバーが！？」

『ブドウ！』

『イチゴ！』

『マンゴー！』

『バナナ！』

四人は錠前を開けバックルにセットし再びロックし、小刀『カッティングブレード』を落とす。

『Look on！』

『ハイ〜！』

『ソイヤッ！』

『カマン！』

『ブドウアームズ！龍・砲！ハッハッハッ！』

『イチゴアームズ！シュシュッとスパーク！』

『マンゴーアームズ！Fight of Hammer！』

『バナナアームズ！Knight of Spear！』

開いた口が塞がらないとはこのことだろう。最悪のシチュエーションだ。まさか、インベスゲームがここまで進んでいるのか。

「さあ、せいぜい死なないように苦しみがきなさい！」

四人の戦士が一斉にかかってくる。やるしかない！

「ハア！」

「甘い！」

咲夜から放たれたイチゴクナイ二本を掴み一本を咲夜に投げ返す。

そしてもう一本をブドウの門番さんに投げて牽制する。

「潰れちゃえ！」

マンゴーの子がカッティングブレードを二回下す。やべ！

『マンゴースカッシュ！』

「チィッ！」

薦を発生させ手足を縛り必殺技の初動を消す。

「ハア！」

「っ！ッラァ！」

バナスピアーの振り下ろしをスウェイでかわし、懷に飛び込み渾身の右ストレートをかます。流石にたまらなかったのか後ずさる。「ロックシードを使うのは俺のポリシーに反するんだが仕方ねえ」懷から戦極ドライバーを装着し、自分のロックシードのカギを開ける。

『ミラクルフルーツ！』

3・無頼と

「変身！」

『ミラクルフルーツ！』

頭上の空間にクラックが現れ、そこから巨大なミラクルフルーツが出てきた。

ミラクルフルーツロックシードを戦国ドライバーに装填し錠を閉め、カッティングブレードを降ろす。

『Look on！』

『ソイヤ！』

『ミラクルフルーツアームズ！武の道、オン・ザ・ロード！』

ミラクルフルーツは変形し甲冑へと変化した。

背中に背負われていた身の丈以上の朱槍『紅蓮丸』を片手で振るう。大きく、太く、重いその一振りに紅魔館のアーマードライダーたちは戦慄した。

「ここからは俺のステージだ！」

紅魔館のアーマードライダーたちは決して素人ではなかった。どこぞオレンジの巫女にその相方のパインな魔法使いを筆頭に様々なアーマードライダーたちと戦ってきた。だが、その戦闘経験がある故に察してしまった。目の前にいる敵の実力を。

「ふ、フフフ。いいわ、ならその運命を覆してあげるわ！」

だが、館の主、レミリアだけはその瞳に闘志を宿し、バナスピアを上段に構え立ち向かってきた。

「ハァッ！」

互いの獲物が振るわれぶつかり合う。そして刹那の鏖迫り合い。智幸がここで先に足払いで体制を崩す。

「ホッ！」

「グッ！」

体制を崩したところにさらに蹴りで追い打ちをかける。

「ハァ！」

「よっと！」

真後ろから飛来したイチゴクナイをキャッチする。

『ハイー！ブドウ・スパークینگ！』

「咲夜ちゃんは囧か！」

ブドウ龍砲から放たれる必殺技を、

『ソイヤ！ミラクル・スパークینگ！』

フルーツ状態に戻った鎧で光弾を防ぎ、美玲に接近しすれ違い様に腰に差した無双セイバーを振り抜いた。

「グハ！？」

同時に返信が解除される。一人目。

「よくも美玲を！？ゆるさん」

『カマン！マンゴー・スカッシュ！』

フランがマンゴー型ハンマーを投げつけてきた。

二回カッティングブレードを落と、エネルギーを槍に集中させる。

『ソイヤ！ミラクル・オーレ！』

「おらぁ！」

槍を投擲する。空中でぶつかり合った槍とハンマーが火花を散らし競り合うもそれは一瞬だった。俺の槍が競り勝ち、投げ槍はフランへと直撃する。

「ぐ、ああああ！」

フランの変身解除を確認する。

二人。

そして、残りの二人へと向かい合う。

三人考えていたことは同じだったようで、レミリアはカッティン
グブレードへと手を伸ばし、俺と咲夜は自らのロックシードを無双
セイバーに詰め込む。

『カマン！』

『バナナスカッシュ！』

レミリアのバナスピアーから放たれる大型のバナナが。

『一、十、百、千！』

『イチゴチャージ！』

分裂した無数のクナイ型光弾が。

『ミラクルチャージ！』

無双セイバーから放たれる紅の斬撃が放たれる。

「「ハァア！」」

エネルギー同士の衝撃は爆発を起こし、空気を震わせ、その衝撃
が三人を叩いた。

煙が立ち上り、周りが見えない。

相手を確認できない。

だが、相手は倒れていない。俺の勘がそう囁いた。
気づけばもう駆け出しカッティングブレードを下ろしていた。

『ソイヤッ！』

『ミラクルスカッシュ！』

「セイツハアーーーーー！」

高エネルギーを纏った跳び蹴りが二人を直撃する。
再び煙が立ち上り、今度こそ立っていたのは一人だけだった。

あんな爆発してたけど大丈夫かな？
一応手加減したんだけどなあ。

4・住み込みとバイトと執事長

紅魔館が誇るメイド長、十六夜咲夜の朝は早い。だが、この日は遅くなってしまった。そう、訪問者である智幸との戦闘で意識を失ってしまったからだ。いつもだったら日の昇る前から行動を起こす彼女だが、今日に限っては比較的に遅い目覚めとなってしまった。

「んん。ここ、は……私は、一体？」

寝惚けが入っているのか昨晚の戦闘のことを思い出すのに時間がかかってしまったことは否めないだろう。

「ハッ！そうだわ！お嬢さっ！」

主人の安否確認の為身体を起こそうとするも少し痛みが走る。痛みで冷静を取り戻し一度周りを見渡す。

「ここは、客室？」

なぜ客室に寝ていたのか？そもそも誰が寝かせたのか？あの男はどうしたのか？等の疑問が堂々巡りしていると、扉が開かれる。

「お！目を覚ましたのか！いやゝよかったゝ」

とひと安心と言いたげな顔をした智幸を見て咲夜は目を見開かせて驚いた。え？こいつ何してるの？と。それはそうだろう。何せ自分等を叩きのめした男が――口ぶりから察して――自分を治療し、あまつさえ執事服を来ているのだから。

「あなた！何故！っ痛！」

「おいおい、あんまり無理すんなよ？順を追って説明するから。な？」

その言葉に渋々と咲夜も敵意を下げた。警戒は怠らないが。その様子に苦笑を浮かべるも、訳を話し始めた。

「あの後、すぐに目を覚ましたのはあんたの主、レミリアだった。俺は元々、ここの住人じゃないのはもう知っていると思うが、俺はある目的を果たすためにこの幻想郷にやって来たんだ。で、宿代わりに泊めてもらおうかと思ったら、喰われかけたと言うわけだ」

「吸血鬼の館にノコノコとやって来たあなたが悪いのですよ。で、その目的と言うのは？」

「幻想郷で今流行っているあれ。『インベスゲーム』を途絶えさせる。あわよくばすべてのロックシードを破棄する」

「インベスゲームをっ!？」

インベスゲーム。それは、弾幕ごっこと同様にこの幻想郷で流行っている決闘方式である。弾幕ごっことは本来力のある人間や妖怪、またはそれに準ずるものの決闘、自衛手段でしかなかった。逆説的に力のない人間は自衛手段すら持てないと言うことだ。だが、インベスゲームはその類いではない。インベスゲームとはロックシードを用いてインベス同士を戦わせるゲームだ。

つまり、極論ロックシードさえあれば誰でも決闘を行え、更にレミリア達のようにドライバーがあれば変身でき、自衛手段にもなる。これで平穏が訪れる。だが、幻想郷と言う場所はそれをよしとしない。

「幻想郷は『人は妖怪に脅かされ、妖怪は人を脅かす。そして人である博麗の巫女がこれを退治する』その概念によってバランスを保ち存在することができているはずだ」

「確かにその通りですが、それとこれになんの関係が」

「それをインベスゲームの名の元に人間が力を着ければバランスが崩れ幻想郷が消滅する」

「っ!？」

「そもそも、インベスゲームとロックシードはヘルヘイムの果実や植物に対抗するための苦肉の策による副産物とレミリアから聞いた」

「ええ、その通りです。幻想郷に突如として現れた謎の植物。通称『ヘルヘイムの植物』。そしてその果実をドライバーを通してもぎ取ることによってロックシードを作ることができる。そしてまた、ヘルヘイムの植物と共に現れたインベスたちに対抗するためのライダーステムとロックシードなのです」

それもレミリアから聞いた、と言い一旦間を開け再度真剣な雰囲気割り増しにして智幸は更なる結論を口にした。

「もし、幻想郷が消滅するような事態になればヘルヘイムの侵蝕が外の世界にも広がる。更にヘルヘイムへの対抗手段がない状態でそうなれば世界が減びるのも秒読みだ」

「では、それを阻止するために？」

「ああ、そうだ。インベスゲームを終わらせる」

なるほど、と呟き今までの話を整理した。言っていることは突拍子もないことだが理に叶っている。それに信憑性もある。仮になかったとしても今や外の世界で暮らせない身。このリスクは見逃せない。

「それでなんだけど、その～思いっきり叩きのめしておきながらなんだけどよ。できれば、協力してもらえると、うれしいなーって」

さっきまでの雰囲気はどこにいったのか。今は申し訳なさそうにして歯切れの悪い物言い。感情豊かな男だ。何とも不思議で面白そうな男だ。男性との交流が少ない咲夜は智幸に対しそんな感情を抱いた。

「ええ。わかりました。お嬢様の許しが降りた場合はあなたに協力することを約束します」

「そうか！ありがとう！いや～マジよかった！」

心からの安堵の笑みを浮かべる彼を見て、彼の言ったことは嘘ではないんだと、直感したのであった。

「改めて、十六夜咲夜です。よろしくお願いします」

「ああ！葛葉智幸だ！よろしくな！咲夜！」

「そういえば、何故執事服を着てるんです？」

「いや、あんなことしちゃったしせめてもの償いとして、暫くは家事を手伝うって言ったら『なら、これを着なさい。そしてきっちり役割を果たすこと。いいわね？』って言われて」

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~21667

東方果実鎧『紅』

2019年08月13日 02時21分発行